

**留学先国名** : アメリカ

**留学先学校名** : ジョージア州立大学

**留学期間** : 平成 27 年 8 月 15 日 ~ 平成 28 年 5 月 12 日

留学中は楽しいことあり、苦しいことあり、様々な経験をすることができたと思います。そんな数多くある思い出の中でも、留学が終了した今、特に強烈に思い出することができるのは、やはり、もがき苦しんだ授業の思い出です。最初のセメスターは、先生の話す英語が聞き取れない。聞き取れないから、何を指示されたのか分からない。とりあえず、周りの生徒の見よう見まねをしてその場を乗り切ることで精一杯でした。アメリカまで来させてもらったのだから、このままではダメだ、早く周りに着いていかなければいけないというプレッシャーで、授業中は、常に緊張してしまっていました。課題をこなすのにもかなりの時間がかかってしまい、できない自分、力不足の自分というものを日々、目の当たりにさせられて、楽しいできごとの最中も、常に心のどこかではモヤモヤを感じていました。ただ、ここで何もしないままダメになっていくのも悔しかったので、分からないところはとにかく先生に質問しに行ったり、なかなか通じない英語は、チューター制度を使って発音の指導をしてもらったりをできる限り行っていました。そんな第一セメスターも終わり、第二セメスター。だいぶ慣れてきたのか、授業中の先生の発言や生徒の発言が分かってきたぞ！と手ごたえを感じ始めていたさなか、再び挫折を味わいました。第二セメスターの授業から始まったグループワークで、ネイティブのように流暢に話せなかった私は、戦力外だと言わんばかりに、他のメンバーから相手にされず、彼らだけで話を進められていってしまいました。この時はかなり落ち込んだのを覚えています。テストは、時間がかかっても暗記さえすれば、なんとかこなすことができていましたが、実際の授業での実践力はまだまだだと思い知らされました。

そんな、挫折の日々満載の留学だったのですが、その間、一つだけ心がけていたことがあります。それは「とにかく動くこと」でした。知り合いも友達もゼロの状態から始まった今回の留学でしたが、だからこそ、自分が動けば動くほど輪が広がっていくことを実感しました。まずは、現地の友達とは時間の都合がつく限り交流するようにしていました。世界各国からの友達としゃべっていると、自分が世界各地を旅行しているような気分になれてとてもワクワクするものでした。また、大学の中だけでなく、大学の外の世界も見たいという気持ちが留学当初からあったので、外の世界へ出て行くなら長期休暇しかないと思い、長期休暇の過ごし方は、早い時期から計画を練っていました。冬休みは、大学のプログラムを通じて、ボランティア・スタディーツリップに参加し、アラバマ州のいくつかの NPO でボランティアをしながら人種問題について学習しました。具体的には、セカンドスクールで現地の子供たちと触れ合ったり、ヒスパニック支援団体や歴史ある黒人教会を訪れたりしていました。そして春休みは、フロリダ州にある住宅支援を行う NGO に参加して、家を建てるという建築ボランティアに取り組みました。大学の授業で、思い通りに表現できない自分の英語力を嫌というほど思い知らされていたので、プログラムに参加したところで、周りの人たちと上手くやっていけるのだろうか、私が参加したらボランティアの足手まといになるのではと、プログラムに応募してからプログラムが開始す

るまでの期間は、不安で不安で仕方なかったです。でも、限りある留学期間、「とにかく動く」という心がけを実践し、一步を踏み出せたおかげで、これまで知ることのなかった世界について知ることができ、貴重な経験を得ることができたと思います。

次に、アメリカの文化についてですが、アメリカと言えば、人種の坩堝と呼ばれるだけあって、様々なバックグラウンドを持つ人がいます。日本では、私は全くと言っていいほど、肌の色を気にしたことはなかったのですが、アメリカに来てからは良くも悪くも人種について考えさせられました。しかも、留学先であるジョージア州は、ディープサウスと呼ばれる人種差別が激しい地域の一つで、人種に対して、敏感な人は多いかとは感じていました。実際のところ、私は直接的に差別をしたわけでも、差別を受けたわけでもないですが、ジョージア州内には、いまだに、白人の優位性を信じて疑わない南北戦争の南軍旗が掲げられた場所があったり、KKKによる活動が行われたりしています。グローバル化する世界の中で、異なる人種への理解が進み、人種差別は減ってきているのではないかと楽観的に考えていた私は、この現実を知ってショックを受けました。日本でいると、人種の壁を日常生活で感じる事がなかったので、ジョージア州で見聞きした世界など、容易に想像がつかなかったと思います。そういった意味で、このショッキングな出来事は、自分の世界観を広げるものでした。ここまで書くと、アメリカ南部のイメージが悪くなってしまいそうなので、続いて、南部の魅力も述べたいと思います。それは、サザンホスピタリティーです。サザンホスピタリティーとは、アメリカ南部特有のおもてなしの心のことを言います。道行く人が「調子どう？」と互いにあいさつし合う光景が街にはあふれていて、現地の友達もすぐおもてなし好きで、「休日は家に遊びにおいでー。」などと、誘ってくれることが多く、あたたかな気持ちになれました。留学中、孤独だけは感じなかったのは、このサザンホスピタリティーのおかげだったのかもしれない。

あっという間に過ぎていってしまったけれど、思い返せば、濃い日々を送ったアメリカでの9カ月。その間で、私が変わったことと言えば、精神的に強くなったことだと思います。打たれ強くなりました。アメリカに来て、言葉が思い通りにならない、周りが普通にできることができないという悔しい思いを何度も味わったことで、多少困難にぶちあたっても、そこで、めげずに突き進む力ができました。とにかく恥をかいても大丈夫、失敗しても大丈夫、次に進むことの方が大事という心構えができたことで、ちょっとのことで動じなくなりました。今後は、留学で得た知識や経験を原動力に、目標である、世界の舞台で活躍できる人となるべく頑張っていきたいと思います。また、私が留学に憧れを持ち、挑戦してみたいと強く思うようになったきっかけの一つが、過去に聞いた留学経験者の話でした。私も自身の留学経験を語っていくことで、これから留学を考えている人の一步を踏み出す力になれたらと思います。

最後になりましたが、大阪府の奨学金を頂けたおかげで、私の留学の活動の幅が広がりました。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。